

日本漢籍集散の文化史的研究

—「図書寮文庫」を対象とする通時的蔵書研究の試み—

日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究

宮内庁書陵部収蔵漢籍の伝来に関する再検討

—デジタルアーカイブの構築を目指して—

平成25年
12月7日(土)
13:30-17:00

予約不要
参加無料

合同成果報告会

会場

東京大学東洋文化研究所 3階 大会議室

東京都文京区本郷7-3-1 東京大学本郷キャンパス内

本研究は、宮内庁書陵部に収蔵する「図書寮文庫」の漢籍を対象とし、日本伝来の漢籍を含む蔵書群の形成と変転の過程を確かめ、蔵書研究の視点に立って漢籍の文化史的意義を捉え直し、日本文化に対する漢籍の寄与を明らかにすることを目的としています。

図書寮文庫とは、宮内庁書陵部の収蔵する歴史的文献のうち、正倉院宝物、公文書等を除いた古典籍を管理する組織であり、従来、書陵部本と称する図書を収めています。その中には公武の伝世品を含み、特に江戸幕府の紅葉山文庫本から明治期に抜き出された善本群には、中世以来伝承された金沢文庫本など、日本漢籍史上、最重要の蔵書に由来する資料を含んでいます。また近世の江戸幕府由来の資料に、御所や宮家、公家の伝本をも加え、日本漢籍史の屋台骨と見るべき、複合的蔵書群を構成しています。

図書寮文庫本の書誌学的研究は、目録解題の整備を中心に行われてきましたが、昭和28年に刊行された『和漢図書分類目録』より約60年を経て、各方面の研究も進捗し、内外の資料との比較研究を行う環境は、格段に向上しました。そこで本研究では、伝本に対する基礎認識の見直しから始め、伝来の過程に重点を置いた漢籍の再調査を加え、蔵書史という視座から、その意義を問い直すことを課題としています。

この度は、図書寮文庫の漢籍の現状、書誌調査による文献資料の再発見、調査結果に基づくデジタルアーカイブの紹介と、3つのご報告を行い、広く一般社会や、学界の皆様と成果の共有を図り、今後の展望を開いていけるように、この報告会を計画しました。



春秋経伝集解30巻 [鎌倉]写 清家点書入 金沢文庫本 巻首

晋の杜預が注釈を附した『春秋左氏伝』の旧鈔本。30軸のほぼ完全なテキストで、唐代以前の『左伝』の姿を止めた写本である。平安時代末期の明経博士・清原頼業が大成し、孫の清原教隆が北条実時に伝授した清家の訓法と共に、実時の息男篤時、顕時が書写させた、金沢文庫本。日本漢学研究、日本語学の資料としても重視されている。近世には徳川家康の所有となり、駿府の御文庫から江戸幕府の紅葉山文庫に移された、いわゆる駿河御譲り本の一。



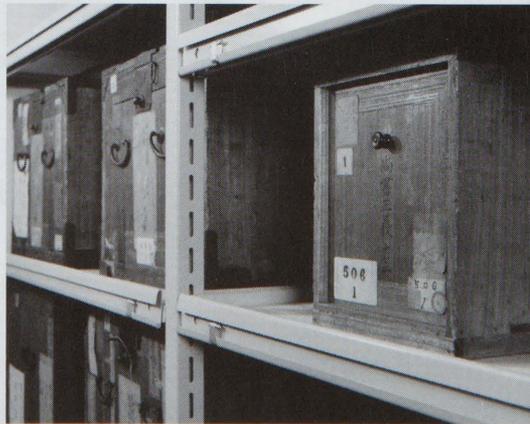
尚書正義20巻 [宋孝宗朝]刊 円種加點識語 金沢文庫本 巻首

唐の孔穎達等が皇帝の勅を奉じて編集した『五経正義』の一で、儒経解釈の古典として重用された。宋代以降、孔安国の作と伝える古注を伴った「注疏本」が流布したのに対し、『正義』のみから成り、注疏合編の際の省略や改訂を経ない「単疏本」として著名な版本である。もと金沢文庫の蔵品で、嘉元2年(1304)、金沢文庫を管理した称名寺の僧円種が句点を加えている。その後、鎌倉の円覚寺に移され、五山禅僧の修学に供された後、民間に流失していたものを、江戸後期に幕府が発見・収蔵し、紅葉山文庫本とした。



春秋経伝集解30軸
収納箱

金沢文庫本の『春秋経伝集解』を納める、紅葉山文庫以来の木箱。蓋の貼り紙に「駿府御文庫本」等の標識が見える。下段は同じく宋版『太平御覧』、また宋版『誠齋集』の箱。



尚書正義17冊
収納箱

金沢文庫本の『尚書正義』を納める箱。江戸後期に幕府の有となったが、伝来が異なるため、駿河御譲り本とは別製の木箱を使用する。

[主催]

平成24-25年度 東京大学東洋文化研究所東洋学研究情報センター共同研究「日本漢籍集散の文化史的研究—「図書寮文庫」を対象とする通時的蔵書研究の試み—

平成24-28年度 日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(A)「宮内庁書陵部収蔵漢籍の伝来に関する再検討—デジタルアーカイブの構築を目指して—